



カイラス山



ボロブドール寺院遺跡

新年明けましておめでとうございます。
旧年中はご厚情たまわり深く御礼申しあげます。
本年もどうぞ宜しくお願い申しあげます。
年頭に際しひとことご挨拶を申しあげます。

さて、今年の干支は午年ですがその午年にちなむかのような驚くべき聖山カイラス山と馬の口山から湧き出る大河の源泉についてお話申しあげさせていただきたいと思います。

うかつなことではありましたが、小生、NHKの『天空の聖地チベット ヤルツァンボ河』の映像をみるまでは、カイラス山について全く知らなかったのがあります。大半の人生の中で、チベット高原の奥にある聖なる山カイラス山を意識していなかったのです。このまま知らずにおめおめとこの人生を終わらせていたのかと思うと背筋が凍るような思いすらいたしました。

小生は、まことに残念なことではありますが、この世に生を受けて以来、一度もインドにもチベットにもジャワにも出かけたこともなく、機会を逸しておりました。このカイラス山の姿を見て、今ほど残念に思えることはございません。カイラス山巡礼のちですら標高 6000 メートルを超えるところですから、よほど強靱な身体でないと耐えられないでしょう。しかし、テレビ報道の映像とはいえ、この実際のカイラス山の光景を見て、大げさでも何でもなく、魂が震撼し、もしかすると、小生の人生の大半の命題である「魂の遍路歷程と本不生」をそのまま象徴する山であると直観せずにはおれなかったのであります。

小生の新年の主題は「魂の遍路歷程と本不生」にあります。カイラス山と馬の口山の大河の源流（じつは四大河の源泉がカイラス山から流れ出していると伝えられています）を見てそう確信しております。

なぜ、そのような経緯に至ったか、稚拙ながらも小生自身の人生の遍歴を通して、そこに、見えざる世界からの不可思議な導きと現象の経験について、たいそうなものではありませんが、触れさせて頂きたいと思います。

カイラス山は1億5千万年前の地球における地殻変動における造山運動により6千万年前にヒマラヤ山脈とともに海底から盛り上がりってきた山脈の中に出現し、形成された唯一無二の奇跡的な山です。地殻変動という莫大なエネルギーによりうねりを伴いながら盛り上がりできた他の山脈とは全く異なっていて、不思議な形状をしています。

カイラス山は平行な階層上に山で、しかも、三角四面体のピラミッド状の不思議な形をした山でしたので、有史以来、人類は、この山を神の住まう山とし

てカイラス山に登ることを禁じてきましたので、人類未到の山です。

更に、不思議なことは中央に階段状の印があり層状の山とこの中央の直線が頂に向かって伸びていて、それが、十字架や卍方に見え、神秘的な山の象徴ともなっております。

更に、不思議なことはこの山の基壇部分の大岩の壁面には、雲上菩薩のような、あるいは蓮台のような不可思議な模様が顕れております。

小生は、NHK で放映された映像を観るまでは、この山のことは全く知らずに生きておりました。うかつなことでありました。

最近、初めてこの山を見て、まさかこのような姿をした山が現実存在しているとはかなりの衝撃を受けたのであります。

と申しますのも、この山の造形は、まるで、小生が見えざるものの導きを得ての人生をかけて導かれてきた本不生の不可思議なる法理の世界をそのまま映し出してい山であったからです。まさか、大自然界が作りだした山にこのような山が実際に存在しているとは！とにわかには信じがたく驚愕せずにはおれなかったからです。と同時に、自身が導かれて辿り着きつつある「魂の遍歴」性の不可思議性をみごとに証明する山であると映ったからであります。

小生がこのような「階層状の不可思議な山」に関心を持った経緯は、実は小生が生まれ育った近くに萬歳楽山があり、その山に導かれてのことにあります。小生は萬歳楽山の麓で生まれ育ったのですが、正直、萬歳楽山については全く知らずにそだってきました。しかし、平成に入って、見えざる世界から萬歳楽山登嶺を明確に促されてから、様々な変動を体験することとなり、萬歳楽山が指し示すものは何かを問わざるを得なくなりました。

平成 23 年東日本大震災の前後には、かなり見えざる世界からのメッセージと思われるような不思議な事象が小生の近辺で頻発しはじめ、境内のつくばいに不可思議な形をした氷像現象が頻繁に現れたり、予測してもいない仏像(チャクラサンバラ、説法の印を結ぶ釈迦如来像、黒阿弥陀仏、紅玻璃色無量壽如来、仁和寺秘宝と同型の薬師如来と観法次第に基づいて刻された聖観世音菩薩像など)を複数の仏像を勧請することになったり、普段は意識もしない不可思議ないくつかの書物が手にはいつてきたり、自然界や世界の情勢不安な情勢を映し出すかのように、小生の周辺世界でも不可思議とは云え騒がしいほどの変化が起きておりました。

特に、令和になり感染症のパンデミックやプーチンによる戦争が始まってからは、こうした不可思議な現象はまるで相似するかのように起き続けておりました。

といいましても、決して特異な体験というより、ごく自然に起きていたので

あります。

さて、小生がこうした中で何よりも強く「階層状の不可思議な山」に関心をもちましたのは、数年前のことではありますが、ある方の「枕経」に臨み経を上げておられますと、突然、その方が、ある清浄な山道の石段を登る後ろ姿が見えまして、その方を追うというような内面的ビジョンを三度ほど経験することがきっかけでありました。このときに小生は「「階層状の不可思議な山と魂の遍路歷程」に深い関心を持たざるを得なくなっていました。

枕経の際に感受する一連の流れは人それぞれのものではありましたが、しかし、共通のプロセスがあるようにおもわれました。

亡くなった方は、必ず、森を通り抜けて不可思議な山に向かい、その山の石段を一步一步登ります。やがて、広場に出ると、そこで、歩みを止めて、何やら物思いにふけています。やがて、思い直したかのように、向きを左に変え、そこから山に沿うように歩み出します。山を右回りに一巡する様子です。一巡すると、先ほどの正面の広場に出ます。すると彼は山の正面を向いて、更に奥にある正面の石段を登りはじめます。一つ上の広場に出ると、そこで、しばらく歩みを止めて、それからおもむろに右回りに一巡し始めます。これらのことを数段繰り返しているようなのです。

途中で気づいたのですが、そのとき、全く不思議でならなかったのは、山を水平に右旋する彼の右手の山の面に彼の一生と思われる映像が映し出されていたのです。彼はその映像を見ることなくただゆっくりとうつむいたまま山を廻っているのですが、その映し出されている山の手の映像は、明らかに彼の人生であり、彼の歩みにあわせて影のように映し出されおりました。はじめはよくわからなかったが、どうもその映像は彼の人生の生涯を再現しているものでありました。しかも、それは、彼が、この世に生を受けてから死に至るまでの期間ばかりでなく、彼がこのように生まれる前の生涯から映し出されているように見えます。背後からその様子を見ていた小生には、どうもこのえいぞうは、その人物の前世から現世の生涯が映し出されることであるのではないかと感じた次第です。おそらく、これは亡くなった彼が先ず自分自身の生涯を内観しているに違いないと思ったのです。

そして、やがて、ある階梯にまで進んだとき、彼は、ふと、歩みを止めて立ち止まり、山に向きあいます。すると、不思議に、スーッとまるで山の戸が開くかのように開いて、そこへスーッと入ってしまいました。後ろから付いて来た私は、どこへ行くのかと慌てて覗きこんだが、彼のこれから赴く世界は、余人には見ることは許されないのでしょうか、一瞬垣間見ることはできま

したが、すぐに閉じられてしまいました。その奥には、確かに、彼が親しんできたもう一つの世界があったのです。

寺に住んで 70 数年、たてつづけにこのようなことを経験するのは初めてでした。めったにないので、はて？これは何を感じているのであろうかと不思議でなりませんでした。私の幻想なのだろうと、あまり、詮索せずにおりました。

枕経の折の不思議な内的体験をしたのでありますが、このとき、たまたま古本屋から取り寄せた梅尾祥雲著『理趣経の研究』が届き、何気なく書物を開いたところ、たまたまそのなかの衝撃的な図版を目にしたのであります。

何と！驚くなかれ！その図版はまるで亡くなった人が山を登り右繞しながら自己凝視をする光景と全く同様の、しかも、お釈迦様の前世から悟りをひらき光り輝くものとなる釈尊のご生涯、遍路歷程が描かれていたのであります。9 世紀から 10 世紀にかけて建立されたジャワのポロブドールの寺院遺跡でありました。小生はこの理趣経の研究という書物を見るまではこのポロブドールの寺院遺跡のことは全く知らなかったのですが、これまで知らないできたことを深く恥じるばかりでありました。階層状に築かれたジャワのポロブドールの寺院遺跡の写真を見て、まさしく、萬歳樂山の山頂や枕経ときに黙想された階層状の不可思議な山は、まさにこれではないかとさえ思ったのであります。

研究学者に依れば。ジャワのポロブドールの寺院遺跡は三角四面体の階層状のピラミッド構造であり、そこには、釈迦牟尼佛世尊の前世の物語やこの世の生涯、更には覚りを深め、やがて光り輝くものである大日如来を中心とした金胎两部不二の曼荼羅界に至る人間釈迦にの覚りの世界を階層構造状に築かれた寺院遺跡であったのです。

亡者が山を登りながら自己を見つめていたことは、人間あるお釈迦様が覚醒していくプロセスと一緒であること。人間ひとりびとりに前世や今世や来世に亘りこのテーマがあたえられていることが示唆されているのかもしれないと思った次第です。

実は、あの世とこの世があり、そこが階層構造上になっており、天上界と地獄界が三角四面体の上下逆構造上になっていることを探求するきっかけは、昭和 45 年 4 月 8 日に小生の真言大阿闍梨である師僧觀世麟祥大和上から紹介された不思議な人物と清樂大全との邂逅にありました。



ケーベスのタブラ

ところで、カイラス山の指し示している重要な事柄に気づく背景には、『大楽不空真実三摩耶經』（般若理趣經）の教えにも通じていると考えがございました。

小生がこの『般若理趣經』の手ほどきを初めて受けたのは、昭和 43 年 8 月に観世麟祥大阿闍梨の門を叩いたときでありました。以来、般若理趣經は今日に至るまで小生の拠り所としてまいりましたが、しかし、非常に理解することが難儀でありまして、師僧からは安易な解釈をしてはならないといさめられていたものです。しかし、いつかその本義を理解することも可能であるから、怠らず精進しなさいと常々言われていりまして、死者を送り出すときには大事な經文であるから、必ず読誦供養するようにしなさいといわれておりました。

さて、ボロブドール寺院遺跡の研究書を通して気づかされたことがあります。

それは、「人間の原罪を救うものは光り輝くものであり、光り輝くものは人間自身にある。」という般若理趣經の大楽の根本義を踏まえたボロブドール寺院遺跡が指し示しているものであります。

まさに、人造のボロブドール寺院遺跡ですが、更に驚いたことは、この寺院遺跡と同様の形状をした山を数億数千万年前に地球のダイナミックな造山運動によってもたらされていたカイラス山の存在であります。まさしく、カイラス山はこの光り輝くものである本不生の源泉を燦然と指し示していたのだ感じているのであります。

今世紀に入って、人間は未曾有の苦しみに陥っています。異常気象・大震災・ウイルス感染症や核戦争の脅威……。大国の権力者がまるで権力を手中にしてならず者のように次々仕掛ける戦争を前にして、人類の叡智である国連や国際規範が全く無視され、機能しないという前代未聞の状態に陥っています。

何という時代にわれわれは生きているのでしょうか。人類はまるで叡智を反故にしてしまったかのようです。欺瞞に満ちたイデオロギーや正義や信仰の名のもとに、大国の傲慢な侵略や進攻が有無を言わせず、いのちをいのちとも思わぬ暴力の応酬を繰り返えそうとしております。これを止めるのは誰なのでしょう？彼らが口に祈りを捧げる神でしょうか？

歴史を通してみても、人間の作り上げた欺瞞に満ちた神が戦争を止めことは不可能でありました。歴史が証明しています。21世紀に入ってますます手段を選ばず、非業な暴力と破壊の戦争を繰り返し、核兵器に依存している。これは正義でも神のなせる業ではもなく、人間の欺瞞といわずして何というのでしょうか。世界が滅びる前にこの自己欺瞞に終止符をうたねばならないでしょう。その欺瞞性に気づかなければならないものはくとりもなおさず人間自身であり、われわれ自身でありましょう。

さて、カイラス山や馬の口山の大河の源流を見て、小生が感じるものは、はこう感じております。

人々の悲しみと苦悩を直視せよと説いたのはブッダであり、そのブッダの根幹が般若理趣経にあります。

その教えは、亡くなった人が山を登り右繞しながら自己凝視をする光景と全く同様に、ジャワのボロブドール寺院遺跡には、釈迦牟尼仏世尊の前世物語から釈尊が悟りをひらかれ遍照金剛光り輝くものとなられるに至る釈尊の遍路歷程内観そのものが描かれていると思います。梅尾祥雲の理趣経の研究から小生は釈迦牟尼仏世尊は五相成身観を通してあの龍樹菩薩が感得した「南天の鉄塔」の奥義、すなわち金剛界・胎藏界の両部不二曼荼羅界の源泉となる本初不生をボロブドールの寺院遺跡が象徴していると了得します。ブッダ世尊の魂の遍路歷程すなわち悟りの階梯を指し示しているものがボロブドールの寺院遺跡だと感じています。

そして、何よりも重要なことは、これは、人間である釈迦牟尼仏世尊の観法（内観・自己凝視・如実知自心）による「魂の遍路歷程」そもであることです。

すなわち、人は誰しも自らの人生を通し、不生の仏心ただ一つを以てあらゆる生涯を経ながら生かされている光り輝くものであることを覚醒すべきであることを指し示すものであらうと了得します。

「本不生の源泉」より刻々と溢れ出でて、大宇宙からマクロ宇宙に至るまで、すべてのいのちの顕現が「不生の仏心」として、あらゆるもののいのちの本不生の本源から溢れ出でて、局所化しつつも全一なる個として、遍満性と局所性のダイナミックな上昇と下降の互換重合をする魂のダイナミックな変動が与えられた非常にかげえのないものが「いのち」であることを了得します。

全宇宙の宇宙における本不生空より、ダークエネルギー化し、更にそれが、ダークマター化し、そして、現象府中に物質化していく壮大な天地宇宙の創造のダイナミックな生命活動が刻々に繰り広げられているということを了得します。

ボロブドールは人造の寺院遺跡であったが、カイルス山は数億年かけて地球自身があらゆるいのちである魂の遍路歷程を指し示している奇跡の「大曼荼羅」を象徴していると了得します。四つの大河の源流がカイルス山から流出しているということは、大宇宙がすべて本初不生の源流は刻々と今に新たなるものであることを指し示しているということを了得します。

魂の遍路歷程は何の取り柄もなく、脆く儚く消えてゆかざるを得ないいのちであらうとも、その一つ一つのいのちにあの光り輝くものが厳然と輝き導き生み出したかけえのないいのちであることに気づき、創造の営みをもたらすものであることを自らの魂の遍歴を通し、ブッダの内観通し覚醒すべきことを指し示しているものだとして了得します。

最後に

なぜ『魂の遍歴』あるいは『魂の遍路歷程』なるものが、小生の探求の課題であったのではないかと思うことについて、いささか触れてみます。。

その最初の発端は、尊い密教の大阿闍梨である恩師観世麟祥大和上の元で、行者初段階の加行という修行をさせていただいていたときでした。

小さなお堂の修法壇の前で端座し、不動明王の真言を繰り返し称えていたときのことでした。何も考えずに、ただひたすら真言をとこなえるだけでしたが、ふと、眼前に赤ん坊のを取り巻く老若男女の情景が蘇り、やがて、走馬灯のように、その子の生涯が、わが心内に映し出されてくるのを目撃していたのです。

しかし、心は穏やかでしたので、映し出されるままにして、念珠を繰りながらひたすら真言を誦じておりました。その赤子は一歳、二歳、三歳と成長している様子に、あれ？もしかして、この子は自分か？と気づいたのは、その子といつも俱にいと母親が自分の母であったからです。声や感觸や息遣までよみがえっておりました。しかし、何よりも不思議でありましたのは、たとえ自分だとしても、その自分を外側から眺めているような自分でありました。とはいえ、見ているのは今の自分でしたが、見られている幼い自分はしかし、自分自身でありました。この子は他者ではなく、間違いなく当時の自分でありました。行法中、それ一回限りの経験でした。この日は、母ばかりではなく、常に身近で接してきた父や妹伯父叔母いとこ近所の人たちとの関わりの記憶でありましたが、まるで自分がその場で生きているままでありました。映像を見るように映し出されてきたのでありますが、五官六根すべてが働いており、もちろん、人生の喜びも、怒りも、哀しみも、楽しみもそのままよみがえるかのようでありました。確かに、さまざまな苦悩や喜び怒り悲しみ恐怖慢心や羞恥などが走馬灯のように流れていきましたが、流れは、いまここで、仏教の修行をしている自分にまで及んでくると、はたと、これら人生のあらゆる遍歴のすべて、人生でめぐりあってきたあらゆるできごととあらゆる人や動植物との縁が、いまここに導いてきているものであることに気づき、言い知れぬ深い喜びと感謝の念が腹の底から湧いてきて、感動に心が打ち震え、あふれ出る涙を禁じ得なかったのです。そのときの感動は、探し求めてきた仏の救いの教えが、実は、自分の人生の中で満ちあふれていたことに気づいたのです。その感動も、修行が終わり、世間に戻れば、いつものように世俗における自我の応答なかで一喜一憂している愚かなものの人生を過ごしておりますが、確かに、あの修行で気づいた人生の遍歴は魂の遍歴であり本不生の仏心の遍歴を映し出したものではなかったかと、凍てつくような道場の中で目撃した内なる光景の慈愛に満ちた有り難い法灯は今でも消えることはないように思われます。

この世にあっても、あの世にあっても、生死に微動だにしない仏心の輝きが自らの人生の魂の遍路歷程を映し出しているような気がいたします。

合掌